

映像を合意形成の手段として使い成果をあげた、八戸の「ラブ八戸運動」を知って、暫くしてから、運動の核となっているスライド映画「八戸・風と土と心」の製作者が斉藤次男と言つ元松竹映画のプロデューサーであることを知った。

昭和五十五年夏、黒沢大勝田青年会議所理事長と私は高田馬場駅を降りて、学生街のゴチャゴチャした道をスタジオに向つて歩いていった。八戸のような映像が欲しい、自分達の住む街の歴史を知り、未来を創る、新しい街づくり運動を勝田青年会議所の十周年記念事業として始めたいと思つていた。それは、自分たちの住む勝田の街が、非常時に軍需工場が無理やり作られて出来た、「歴史も、特に誇れるものもない街だ」と思つていたからである。

ガラス戸にサウンドクラフトと書いてある小さな建物があった。ドアを開けるとすぐに録音の音が響いてきた。「富士には月見草がよく似合つゝ・凜として富士に向つ」と原稿を読むアナウンサーの説得力のある声が聞えてきた。音を出してはまずい気かして挨拶もろくにせず中に入った。スタジオの人は、私達が来ることを聞いていたらしく、その椅子に座りなさいとはかりに無言で小さな椅子を指差した。

録音が休憩に入り、私達は名刺を出してスライド映画の製作を斉藤先生に依頼した。そして集めておいた郷土史の本や写真の入った観光案内などの資料を渡そうとした。すると先生は「それは、後で、見せて下さい。先ず、自分の眼で見てください。」と受けて取らなかつた。「そのうち連絡してお伺いします。」と言つたきり八月も過ぎ、九月になつても連絡はなかつた。

十月になつて連絡があり、カメラマンを連れて取材に来ることになった。勝田駅に降りてきた二人はのんびりした顔で「変ですね。分からないね。」と頼り無い話ばかりで帰つていった。次に来た時は「変つた人に会いたい」とか「勝田の美味しいものを作っている所へ行きたい」と相変わらず感動するような話や風景とは程遠い話題ばかりで帰つていった。「あの人が寅さんの映画を作つた斉藤先生なの」と誰かが言った。「偽者か、人違いをしていないか」と言つる者まで出て大笑をした。

三度目に来た時も「分からない」を連発、そして言ったことが「作品はウンチと同じでよく消化されるとドンドン底の方にたまって、固まってポロリと出てくるものだ」と変な例え話をした。

それは、昔あった壮大な郷土の祭、ヤンサ祭りのお神輿の出発点である静神社へ行ってみようと集まった時だった。地図を広げて道順を確かめっていると、「鹿島神社の脇を抜けて、大鳥神社を右に曲がって」とやけに神社があることに気付いた。誰かが「おや、静神社と酒烈磯崎神社を結ぶ線上に規則正しく神社が配置されている」と言った。するとカメラマンの及川さんが「その角度は冬至の日の出の方向になっているはずだ」と言う。伊勢と淡路を結ぶ線と同じ方角を向いている古代の太陽信仰の跡だと言う。数日前にエクスペシャルで放映された話と同じものではないかと説明した。そのとき斉藤先生の眼がキラリと光ったのを見た。

「海と神々と太陽の大地」と「那珂大地の歌が聞える」と言うタイトルの脚本が送られてきたのはそれから間もなくだった。

シナリオに沿って映像を集める作業がはじまると自分達が何をしようとしているのかが分かるようになってきた。そこで、内容について議論が起きた。企業城下町にとって大企業と対立するような表現は削除した方がよいのではないかと言う意見がではじめた。その意見に「そんな意識を変えるためにこの映像を作るのだ」と黒沢理事長は譲らなかつた。彼の耳には初めてスタジオで聞いた太宰治の「富士には月見草が…」の言葉が響いていたのかもしれない。

年が改まり、私は十周年の理事長となり、作品も完成したので試写会が始まった。まず、市内にある小学校と中学校の講堂などで上映会をおこない感想文を書いてもらった。すると「普段、学校の事など話した事がない子供が面白い勝田市の映画を見た」と言っていたので婦人会で見せてくれないかと申し込みがあり、老人会でも、町内会でもと毎日のように上映会が行われるようになっていた。そして、取材活動では想像も出来なかつた程の地域についての意見や情報が集まり、映像による街づくり運動は予想以上の反響をもってスタートした。

百回ぐらいの上映会をして見ると、上映前の説明がいかに大切か、見ているようでも見逃していることが多いかを知ることが出来た。そして、この作品を正しく見てもらうには自分達がもっと勉強しなければならないと思うようになっていた。

すぐれた映像を繰り返し見ると、眼から鱗がとれるように本質が見えるようになる。「イルージョンは現実を変える力を持つ」とか「見ることは生きると言う事と同じだ」と言う斉藤先生の言葉の意味も分かるようになった。

その年の暮れ、活動に熱中し過ぎた私は帰る職場を失った。

物を見ることが出来るようになったが、これから何をすれば良いのかと思っていた時、ソフトウェアの会社をはじめようと誘いを受け、今の会社を設立した。

平成十九年八月